

# ふれあい

入賞  
作文集

## 令和5年度 第42回全国中学生 人権作文コンテスト広島県大会

日常生活の中から得た様々な体験や、想い。  
『いじめ』、『障害者問題』、『高齢者問題』などをテーマに、純真な感覚で物事をとらえ、身近な『人権問題』について自分の考えを素直に表現した作品の数々。



人KENまもる君 人KENあゆみちゃん  
(人権イメージキャラクター)

広島法務局・広島県人権擁護委員連合会

第42回 全国中学生人権作文コンテスト

# 広島県大会 最優秀賞表彰式



—ヒューマンフェスタ2023ひろしま—

○写真前列右より

一日人権擁護委員 森 翔平選手(広島東洋カープ)

受賞者 匿名

一日人権擁護委員 茶島 雄介選手(サンフレッチェ広島)



第四十二回全国中学生人権作文コンテスト  
広島県大会 入賞作文集

広島県法務局  
広島県人権擁護委員連合会



## はしがき

法務省及び全国人権擁護委員連合会は、人権尊重思想の普及高揚を図るための啓発活動の一環として、昭和五十六年度から「全国中学生人権作文コンテスト」を実施しており、広島法務局及び広島県人権擁護委員連合会では、本年度も同コンテストの広島県大会を実施いたしました。

本コンテストは、次代を担う中学生が人権問題について作文を書くことによつて、人権尊重の重要性、必要性についての理解を深めるとともに、豊かな人権感覚を身に付けることを目的として実施しているもので、本年度で四十二回目となります。

本年度は、県内の一九八校の中学校から一万一三三〇編に及ぶ多数の作品が寄せられました。応募作品には、日常生活で体験したことなどを基に、純粋な感覚で、こどものいじめなど身近な人権問題と真摯に向き合い、筆者の考えを素直に表現している作品が多く見られました。

この作文集を一人でも多くの方に読んでいただくことにより、人権を大切に考える人の輪が広がっていくことを強く願っております。

終わりに、本コンテストの実施に当たり、御後援いただきました広島県教育委員会、広島市教育委員会、株式会社中国新聞社、NHK広島放送局、株式会社広島東洋カープ及び株式会社サンフレッチェ広島を始め、中学校並びに関係各方面の方々に、そして御応募をいただきました中学

生の皆さんに心から感謝申し上げます。

令和六年二月

広島県人権擁護委員連合会  
広島法務局



優秀特別賞・広島県人権擁護委員連合会子ども人権委員会委員長賞

認めてほしい……………三原市立本郷中学校二年 竹内 嘉音 …… 29

優 秀 賞

祖父と暮らして気づいたこと……………広島県立広島叡智学園中学校二年 奥田 杏 …… 32

難聴の望む社会……………東広島市立西条中学校三年 徳田 葵 …… 35

優しい人になりたい……………広島市立安佐南中学校一年 松田 爽 …… 38

笑顔の輪……………廿日市市立大野東中学校一年 松本 莉奈 …… 42

認めあう優しい世界……………広島市立祇園中学校二年 杉山 愛依 …… 45

私が髪を伸ばす理由……………福山市立大成館中学校一年 小林 龍矢 …… 48

何が違うの……………福山市立鞆の浦学園七年 西田 隆晟 …… 51

普 通……………三次市立川地中学校二年 國重 心美 …… 54

誰にでも……………広島市立高取北中学校二年 長尾 芽依 …… 57

性別の壁をこえて……………広島県立広島中学校三年 今井 花音 …… 60

思いを次の世代へ……………広島県立三次中学校二年 西岡 舞花 …… 66

【審査講評】……………

## 我が家の人権問題

廿日市市立大野東中学校

匿名

「LGBTQ」先日の広島サミットではようやくこの議題が取り上げられ、世の中では理解が進みつつあるようだ。そんな中、私の家では妹がその当事者になり、そのことについて考える機会が増えた。

妹は、もともと可愛いものより格好いいものが好きだった。プリキュアよりも戦隊ヒーローが好きで、スカートよりズボンを好んではいた。私は単にそれだけの事だと思っていたが、思春期を迎えると妹が女性であることを異常に嫌がりはじめた。私はそれが理解できなかった。私もスカートやフリフリした可愛い服は嫌いだ、女性であることは嫌ではない。そのため体のサイズに合わないメンズの服を着ようとすると妹の心がわからなかった。女物でも格好いい服はあるのになぜダメなのか、なぜ同じような柄の服なのにレディースと知っただけで嫌がるのか、また、それが原因で毎日母と言い争う姿に私はイライラした。反発がエスカレートしていくとさらに私は

困惑し、ますます腹立たしく思った。

妹が長かった髪をばっさり切りベリーショートにした時、やっと彼女がLGBTQに当てはまると理解した。それまでの私は妹の性自認が男だと気付いていなかった。なぜなら私たち姉妹は趣味が同じで、よく少年マンガを読んだり一緒にゲームをしたりする似た者同士だと思っていたからだ。そのため、私が嫌ではないことがなぜ嫌なんだ、という思いや、私と話している時は昔と何も変わらないのに、という思いになった。一方で今までの妹の行動はそれが原因だったのかと、その時ようやく納得した。

しかし、私は妹の性自認について理解してもまだ違和感を感じていた。妹は急に男友達と遊ばなくなったり、一人称を「私」から「自分」にしたり、高い声を出さないようにしたり、次から次へと友達が驚く行動をした。

今までの妹を知っているからこそそれらの行動にショックを受け、「元に戻ってほしい」と思ってしまうことがあった。

私は今まで、LGBTQに対する偏見はないと思っていた。しかし、いざ身内がそうなると否定的なことを言ったり、考えたりしてしまうことに気が付いた。例えばテレビに性的マイノリティの人が出ていても変だとは思わない。むしろ、そういう人々を批判する人達を許せないとさえ思う。ただそれが身内だと、「きつと気の迷いだろ」「元の妹に戻って」と思ってしまう。このようにして私も家族も、妹を知らず知らずのうちに傷付け、追いつめていたと思う。私は差別なんても有り得ないと思っていたのに、一番身近な家族にそんなことを思ってしまった。そしてそんな

自分にとっても驚いた。そのままでもいいよと受け入れるべきなのに。性的少数者が生きづらい理由のひとつは、こうして家族などからも否定されることがあるからだとして理解した。

私は妹の事で、LGBTQの問題を身近に感じる事ができた。おそらく世の中には、私のようにLGBTQのことを理解している『つもり』の人がたくさんいると思う。しかし、いざ自分の周りにそういった人が現れたら、否定的なことを言ったり、思ったりすると思う。それは仕方のないことかもしれない。ただ、それは私のようにその人を傷つけてしまうことになる。そんな理解した『つもり』をなくすために、まず自分自身や身近な人がそうだったら……と色々な想像をしてみてほしい。

世の中にはLGBTQに限らず、あらゆるマイノリティの人達が生きづらさを抱えて暮らしている。妹も家で、学校で一日中学生きづらさを感じている。私は、SDGsでも謳われた『誰一人とり残さない』世の中になることを願い、自分自身そういった人達に起こる問題を理解し、私の正しいと思う行動をしていきたいと思う。そして皆が同じような気持ちで、少しずつでも世の中が変わって家が、学校が、会社が生きづらさを抱えた人にとって、優しい場所になってほしいと思う。

## 見まもるといふ選択

福山市立誠之中学校二年

黒田 悠成

目に見える障がい、目に見えない障がい。世の中にはたくさん障がいがある。そういった方のためのポスターなどを、たまに町で見かけることがある。そのポスターでは、まるで手を差し伸べる人が正義で、そうでない人が悪であるという印象をうけるものがある。そこで私はちよつとまてよと思うのである。

私は吃音症をもっている。吃音は言語障がいの一つで、話すときははじめの音がつまったり連続してしまったりすることを指す。個人差はあるが、私は三才ごろから症状がはじめた。三才から今までの十年と少し、毎日吃音とつき合ってきた。不便なことも多い。不便な例としてよく挙げられるのは、皆さんもしたであろう朝の健康観察である。名前を呼ばれて、ハイと返事をした身体調が良くないときはその旨を伝えたりする毎朝の儀式。そのたびに、ハイというたった二文

字がなかなか口から出てくれないのである。たしかに、吃音は不便だ。でも、会話が嫌いというわけではなく、むしろ話す事が何よりも好きだ。こうなれたのは私の努力ではなく周囲の人の助けがあったからだろう。そして、その助けは、手取り足取り手厚くサポートするというものではなく、どれだけ吃音がひんぱんに出ても言い終わるまで聴くというものである。吃音の性質として、一緒に言うとなら言えるというものがある。スラスラのレベルは個人差があるが私の場合、吃音の症状がほとんどでなくなる。ならなぜそうしてもらわないのか。それは、つかえつかえでも自分でできたという喜びが何事にも代えがたいものだからである。

ここで、はじめのポスターの話になるわけだ。たしかに、僕が発表でつまったり、会話でつまったりしたとき相手は何もしない。ただひたすらに耳をかたむける。しかし、その対応に私はこの上ない喜びを感じる。生きる希望を見いだせることもたくさんある。ただひたすらに見まもり、応援する。これを障がいのある人への温かい配慮と呼ばないのであれば一体何と呼ぶのだろう。勘違いしてほしくないのは、障がいをもつ人のサポートをするのが悪いと言っているのではないということだ。障がいをもつ人のサポートをする人は本当に尊敬する。僕がいたいのは、アクションを起こし人を直接的に助けるだけが配慮ではないということだ。今回は吃音を例にしたが、吃音以外の障がいにも同じことが言えるのではないかと考える。さらに、障がい以外にも話を広げると、お年を召した方の介護にも通じることがある。そして実際にそれは取り組まれていくようだ。自分でできる事をするといったもので、近年ではそれが広く行われているようだ。

ついでに、私が良いと思った取り組みを紹介したい。吃音関係で、注文中に時間がかかるカフェ

というものである。接客する人は吃音症の人で、その人達に元気づけられた人も多くいるそう  
だ。そして、店員さんを守るためのルールがあり、その一つがこの作文のテーマにつながる「い  
い終わるまでまつ」というものである。

私は今まで吃音のために配慮される側だった。そしてされる側だけでなく、する側として世の  
中に貢献したいという思いが最近強くなっていく。もしその思いが叶うときがきたら、そのとき  
は今までの経験を生かしたい。チャンスがあれば自分でできたという経験を相手にさせたい。そ  
の喜びを、僕は知っているから。

## その人の幸せ

東広島市立松賀中学校三年

杉山 乃々葉

「やったところで、何にもならない。」  
その透析患者さんはそう言ったらしい。母の普段より優しい話し方に、余計に心が重たくなつた。

私の母は看護師だ。愚痴っているが、いつも私たちのために頑張っている。ある日母は、今日は透析があると聞いた。私は聞きなれない言葉に

「とうせきってなに？」

と、聞いた。透析とは、腎臓の機能を人工的に行うことらしい。そしてこんな話をしてくれた。透析の仕事をしているときに透析をやめたいという患者さんに出会うという。透析をやめるということは死を意味する。しかしある患者さんは

「やったところで、何にもならない。帰っても誰もいないし、やめたい。」

と言ったらしい。母も何度も話をして説明しようとするが、患者さんの気持ちには変わらなかった。結局、患者さんの意志を尊重することになり、その人は三日ほどしか生きられないと言われながら、自分の家に帰り、好きなことをして過ごし、二週間を生きて亡くなった。これは患者さんが選択したことだと分かっている、本当に正しかったのかはずつと分からないと母は言った。このように治療のときには、本人の意思と、家族や周りの意志があるという。本人が「辛いしもう何もなくていい」というが、家族は「それでも生きてほしい」というように、意見がぶつかることもある。これを聞いてまず私が思ったのは、難しいということだった。その人がその人らしく生きるときに、その結果「死」が待っているのだとしたら、周りの人はどうしたらよいのだろうか。何をしてあげることがその人のためなのだろうか。母にこの疑問を話してみると、他にもこんな話をしてくれた。治療の時に、体を触ってしまわないように手を固定したり、ベッドから落ちないようにベルトで固定したりすることがあるらしい。家族に許可はとるが本人は認知症で分からないので、すごく嫌がることもあるという。これは、本人の幸せや自由を考えるとあまりよいことではない。しかし、命を守るためには正しいことだ。

「本人は嫌がっているのに体を拘束するのは、人権侵害のようなことじゃね。」

と母は言った。本人にとつては幸せではないことを、周りの生きてほしいという思いで強制するのは、人権侵害なのだろうか。じゃあ、見殺しにしろというのか。二つの話を聞いて、母はどうやって透析患者さんの意思を尊重することを決めたのか尋ねてみた。

「そりゃあ、沢山話し合ったよ。患者さんのやめたい思いの理由とか。でも一番は、患者さんが

ずつと意思を曲げなかったことが大きかったねえ。」

と言った。患者さんは、一人で転んでしまったとき恐怖を感じたという。誰も助けに來ない恐怖。自分の体の状態の恐怖。これからの未來への恐怖。私には想像もつかないほどの深く、重たい恐怖が存在していたのだろう。そして母はこう付け加えた。

「だから最後の時まで一生懸命支えたんよ。訪問看護の人とかすごく色々してくれて、母さんも、いつでも帰っておいでねって、何回も言ったんよ。」

その話を聞き、大切なのはその人のためにしたことがどれだけ考え、悩み、話し合って決めたことなのかだと思った。そして、どんな選択でもどれだけ周りの人が支えてあげるかだと思っただ。その人が自ら死を待つような選択を望んだとして、周りの人はどうしたらよいのかと考えた。一番大切なのはどうしたらよいのか考えているときだと感じた。そして、その人が望んでいない結果でも、本気でその人のことを思っただけで考えた過程があり、そのために本気で支えていることが大切だと思った。

人権で守られる人の幸せは様々だ。死がその人にとっての幸せなときもある。私たちはそんな時、どうしたらよいのだろうか。それは、その人について本気になって考えることだと私は思った。簡単に「死んでいいことなんてない、だめだ」と否定するのではなく、この難しく辛い問題に、一緒に時間をかけて向き合っていくことが大切なのだと思う。これから何が起るかわからない。もし、周りに辛いことに自ら向かっていく人がいたら、私は止めるだろう。しかし、その時に簡単に否定せず、本気で話し合いたい。そして、その人が止まらなくても、自分にできること

を一生懸命してあげたい。生きることが大切なのではなく、死ぬまでの間が大切であり、その過程をその人にとって幸せなものにするために本気で支えることが、私たちにできることなのではないだろうか。

# 自分の生き方は自分で決める

広島県立広島中央特別支援学校中学部一年

竹村 心吾

皆さんは「LGBTQ」という言葉を聞いたことがあるだろうか？そしてなんとなくでも意味を知っているだろうか？最近はニュースでもたびたび耳にするようになってきた。「LGBTQ」とは、レズビアン、ゲイ、バイセクシャル、トランスジェンダー、クィアまたはクエスチョニングの頭文字をつなげた略語で、いわゆる性的少数者のことだ。

そしてわたしは、トランスジェンダー。心と身体の性が異なる人というのに当てはまる。わたしは男性として生まれたが、心は女性なのだ。しかも、視神経こう腫という脳腫瘍があり、弱視で左半身に軽いマヒがある。

自分では覚えていないが、保育園の年中のころから「いつ女の子になれるの？」といつも母にたずねていたそうだ。両親は、初めは幼い子供が言うことだからと全く気にせず、「あなたは男の子に生まれたからあとから女の子にはなれないんだよ。」と毎回答えていたそうだ。しかしわたし

は、年長になっても女の子になりたいと言いつつ、男の子の好きな遊びはいっさい興味がなく、女の子とままごとをするのが好きだった。そのころから妹のワンピースやスカートをはきたがるようになった。そんな様子を見た母は、もしかしてこの子は本当に女の子なのかかもしれないと思つたそうだ。母は当時の気持ちを、「視覚障害や身体的な障害があつてこれから先苦労することは目に見えているのに、更にニューハーフ（当時の言い方）か。この子はどれだけ大変な生活を送るのかと心配した。今思うと不思議だけど、女の子ということを受け入れられない気持ちは全くなくて、ただただ、あなたが苦労するのが可哀想と思つた。」と話してくれた。

わたしは、小学生になつたころから自分のことを「僕」と言わずに「わたし」と言うようになってた。このころのことは自分でも覚えてる。友達に「なんでわたしっていうの？変なの。」と言われた。わたしは逆に「なんで変なの？」と思つた。その時はまだ自分の気持ちをうまく友達に説明できなかった。でも自分のことを「わたし」と言うのはやめたくなかつた。

そして、四年生の時には、より本格的に自分は女の子だと思い、そう行動し始めた。髪の毛を伸ばし始めた。さらに六年生からは女の子の服を着るようになった。このころには「なんでわたしっていうの？」と言つていた友達も受け入れてくれるようになった。六年生の時に担任の先生がわたしの気持ちをみんなに伝える時間をとってくれたからだ。自分の正直な思いを話して、ずつと理解してくれなかつた友達が分かつてくれた時は嬉しかった。ちゃんと話せばみんな分かつてくれるのかなと思つた。今では、両親、学校の友達や先生など、たくさんの方がわたしの思いを受け入れてくれている。

しかし、母方の祖母はまだ受け入れてくれていない。「おばあちゃん家に来る時は女の子の服を着ないで。」「髪の毛を男の子みたいに短く切ったら?」「心吾は男の子なのに女の子みたいなの、はずかしいよ。」などと言ってくる。

わたしは「周りの人はみんな理解してくれたのに、なんで祖母だけ受け入れてくれないんだろう?」と納得できなかつた。周りの人にどう思われても、わたしはわたしだから、女の子の服を着て行きたいと思つた。他の人がどう思おうとわたしには関係ないと思つていた。しかし母に「みんながみんな心吾の思いを分かちて受け入れてくれるわけではないよ。」と言われ、「確かにそうかも。」と思ひ、祖母の気持ちを考えてみた。祖母はずかしいと言つていた。わたしは今まで自分の気持ちを一方的にぶつけるばかりで相手の気持ちを考えたことがなかつた。わたしは女の子の服を着る自分はずかしいと思つたことはないけれど、祖母はそう思つてゐる。両親や友達、先生がわたしの思いを受け入れてくれたように、わたしも祖母の気持ちを受け入れようと思つた。髪を切るのは絶対に嫌だけど、男の子の服を着るのはがまんできると祖母に話し、お互い納得した。

わたしは心の底から自分は女性だと思つてゐる。だからできるところは女性と同じようにしたいと思つてゐる。周りの人には、まずはわたしのような人たちがいるということを知つてほしい。その上で受け入れてもらえれば嬉しい。「LGBTQ」の人の中には、わたしのようにはつきりと周りに言えない人もゐるらしい。周りの人が少しでも分かってくれると思つと、その人たちもカミングアウトしやすくなるのかもしれない。みんなが優しい心を持つて自分と違う考えの人

を受け入れられるような社会になってほしい。

## 私の願い

安芸高田市立甲田中学校二年

行友 晴野

私は自分の兄弟のことを聞かれると、返答に詰まってしまう。なぜなら私には双子の兄がいて、その兄は障害を持っているからだ。

兄の障害は、自閉症と頭の病気の後遺症による身体障害だ。自閉症は乳幼児期に現れる発達障害で、視線を合わせようとできなかったり、何度も同じ動作を繰り返したりする人がいる。私と兄は双子なので、父と母は同じ学校に通わせたいと願っていたそうだ。けれど兄の将来のためには特別支援学校の方がよいと判断し、兄は小学生の時から特別支援学校に通っている。

その話を聞いた私の友達や先生は、その時は驚くけれど、「そういう人もいるよね」と特別視しないでくれる。

けれども、最近気になることがある。それは、兄の車いすを押しているときに、知らない人からジロジロ見られることだ。大人の人はそのようなことはないけど、幼い子供たちは「何で車い

すに乗っているんだろう」と思うのか不思議そうに見る。また、「かわいそうだな」と思いながら通り過ぎる人もいるのだろう。特別視されている感じがして、そういう時は少しさびしい。兄のことを知っている人は、声をかけてくれたり、手伝ってくれたりしてくれる。それは助かるしとても嬉しい。

だが、話したことがない人も手伝ってくれることがある。

今年の春、家族で電車に乗って出かけた時のことだ。その時兄は車いすに座っていた。電車に乗るとき、電車のドアと駅のホームに段差があった。駅員さんは取り外しできるスロープを持ってきてくださり、また、他の乗客の人は席を空けてくださった。駅員さんは当たり前のこととしてスロープを取り付けてくださったし、他の乗客の方も「手助けしたい」と思ってくくださったのが伝わってきた。

こうやって何も言わなくても自然に手助けできるといえるのはすてきなと思う。このような気持ちで周りの人にも伝わっていけば、みんなが過ごしやすい社会になるはずだ。

兄は身体障害があるし、自閉症で何度か同じことを繰り返し返さないと気が済まない。だから、慣れていない人は戸惑うのが当然だと思う。だが、障害を持った人と積極的にかかわってほしい。そうすれば、障害を持った人はとても助かるし、喜ぶと思う。そして私達にとっても偏見や差別をなくすための第一歩となる。

私は自分の兄のことを聞かれることが嫌ではない。説明は難しいが、そこは気にしていない。だが、兄のことを話したときの相手の反応にいつもドキドキする。兄は難しい問いにうまく答え

ることができないので聞いたことはないが、兄も同じ思いかもしれない。

「相手の気持ちを考えて行動すること」

「自分とは違うということを特別視しないこと」

「誰にも当たり前に優しく接すること」

この三つのことを大切にすれば、差別のないみんなが幸せな社会を築けるのではないか。そのような社会でみんな笑顔で過ごせる日々が私の願いだ。

# 勝手に決めつけないで

尾道市立向東中学校一年

森 園美

「やっぱり黒人っておかしいの？」

たった一回聞いたこの言葉が未だに私の頭の隅に残っています。

私は、六才のときにアフリカ大陸にあるザンビアという国に家族で引っ越ししました。ザンビアでは、インターナショナルスクールに通いました。初めは、「こんにちは。」しか英語で話せませんでした。しかし、私には不安や恐怖という感情はなく、いつもワクワクと楽しんでいた記憶しかありません。それは、周りの友達のおかげだと思います。

学校には、ザンビア人だけでなく、世界中の様々な国の人達がいました。その中には、日本人もいました。その子は、いつも会話の意味が分からない私に意味を教えてください、助けてくれました。また、小学校入学前に引っ越した私は、勉強をしたことがなく、授業の内容が全く分かりま

せんでした。そんな私にみんなは、先生にバレないように答えを教えてくださいました。他にも、みんなはたくさん話しかけてくれ、英語も少しずつ話せるようになり、私はみんなと仲良くなっていきました。学校では、たくさんの方の国の人がいることを生かした国の文化を交流する行事がいくつもありました。そのこともあり、友達同士でよくお互いの国の文化に興味をもち、楽しく教え合っていました。そうして、私は先生や友達のおかげで、ザンビアでの生活を楽しく過ごすことができました。

そして、約二年ザンビアで過ごした後、日本に帰国しました。帰国後は、東京都に住むことになりました。通い始めた学校には、海外に住んでいた人やハーフの人など様々な人がいました。私がいた国が「ザンビア」という聞きなじみがない国だったので、みんなは驚いていましたが、差別などは全くなく、ザンビアについてたくさん質問してくれました。

そして、約一年半東京都で過ごした後、広島県に引っ越しました。ザンビアに引っ越す前は、広島県に住んでいたもので、ほとんどの人とは「再会」というかたちでした。引っ越してから年月が経ったある日、私は友達と話していました。すると、

「ザンビアってどこにあるの？」

「アフリカだよ。」

「あゝ。アフリカか。てことは、黒人もいたの？」

「うん。」

「あのさ、やっぱり黒人っておかしいの？」

友達は少し笑いながらそう聞いてきました。そして、私はその言葉を聞いた瞬間、頭が真っ白になってしまいました。最初は、ショックな気持ちが大きかったけど、徐々に怒りの感情がこみ上げてきました。「どうして何も知らないくせにそう言うんだろう。」

私に通っていたザンビアの学校は、文化や食、肌の色が多種多様でした。私は、日本に帰国してから、ニュースで初めて「人種差別」を知りました。なぜなら、ザンビアの友達は人種を理由に差別することがなかったからです。比較的珍しかった日本人である私は差別を受けやすい人種だったのかもしれない。しかし、先生や友達は、私を差別することなど全くなく、最初から私を一人の人間として受け入れてくれました。

私は、いろいろな人に、

「園美ちゃんは、誰とでも平等に接しているいいね。」

とほめてもらうことが多くなり、今では私も自分の長所だと思えています。これは確実に今まで一緒に過ごしてくれた家族やたくさんの方達ののおかげだと思います。小さいころから、偏見や先入観をもつ前に実際にたくさんの方と友達として過ごせた私はすごくラッキーだと思います。だからこそ、みんなが私にそうしてくれたように、これから出会っていく様々な人を一人の人間として受け入れたいです。「○○だから」という偏見が理由で、誰かの性格や態度が分かることはいけません。いつか、みんながそれぞれの違いを受け入れられるといいなと思います。

## 思いやりのある優しい未来のために

江田島市立能美中学校二年

尾崎 愛心

「ねえ、まだなんですか?」「えっ?」後ろを振り向いた。不機嫌そうな表情の高齢の男性が、私達の後に立っていた。私と母は、コンビニの自動案内装置の前で慣れないタッチパネルの画面を操作していた。その男性は急いでいたのだろうか。ものすごく険しい表情で、私達をにらみ付けている。母は「ごめんなさい。もう少しで終わりますから。」と謝った。店員さんも心配そうに見える。それからやっとの思いで画面操作を終えた母は、男性に深々と頭を下げ「遅くなつてごめんなさい。」と、また謝った。レジで支払いをするときにも、母は店員さんに謝っていた。「ご迷惑をお掛けしました。」

私はなぜだか違和感を感じた。なぜ、母はそんなに謝らないといけないのだろう。何も悪い事はしていないのに…。母は毎朝早くから仕事に出掛け、夜遅く帰ってくる。毎日家族のご飯を作り、家の事をして出掛ける。仕事に行けばパソコンや電話、来客対応など忙しいながらも一生懸

命にこなして、家に帰ってくる。人は、やり慣れていることであれば問題なくこなせる。しかし、初めてのことや、やり慣れていないことをするときには緊張したり、手が震えたり、頭が真っ白になったりもする。母は、慣れないコンビニのタッチパネルの操作方法が分からなかっただけだ。それなのになぜ、あんな言い方をされなくてはならないのだろう。

私は母に聞いた。「何でお母さんがそんなに謝らないといけないの?」「何でかな?でも実際に時間がかかってしまったことは事実だし、迷惑をかけたのも事実。おじさんもずっと待っていたんだと思うし、忙しかったから、イライラしたんじゃない?ごめんね。嫌な思いをさせて…。」母は悪くない。悪いのは世の中の仕組みだ。分かりやすいように表示はしているけど、途中で失敗すると、また初めからやり直さないといけなかったり、とても不親切だ。母は続けてこう言った。「もし、困っている人がいたら、大丈夫ですか?何かお手伝いできることはありますか?そう言って助けてあげて欲しい。自分より助けを必要としている人が必ずいるから、周りをよく見て、そういう人がいたら迷わず助けてあげなさいね。みんなで支え合って生きているのだから、感謝の気持ちを忘れないようにしないとね。」

コンビニを出ると、駐車場に「車いすマーク」が見えた。障がい者のための国際シンボルマークだ。普通って何だろう。何を基準にして、何が普通なのだろう。「普通が一番難しい。」母はよくこの言葉を口にする。確かに普通は難しい。人それぞれ普通の基準やものさしが違うから。そう考えると自分の体は普通なのだろうか?手足の不自由な人、目や耳の不自由な人、言葉が喋りにくい人は、普通ではないのだろうか?いや、違う。みんな、普通だ。ただ、人それぞれ得意不

得意があつて、できるできないがあつて、周囲の誰かから何か手助けがあつたり、暮らしやすい生活環境や、みんなが住みやすい街になればできることが増える。ただそれだけだ。障がいのあるなしも関係ない。立ち位置はみんな同じ、同じ一人の人間だ。目の色や顔の形、肌の色、国籍が違うように、自分が不得意なことがあるように、体の一部が不自由なだけでできないことがあるだけだ。それを手助けできる人が助ける、暮らしやすい環境を整える、誰かが誰かを支える。そうやってみんなが一人一人を支え合つて助けあつて行く世の中ができていけば、思いやりのあふれる明るい未来になるのではないだろうか。

障がい者、健常者という区別はない。みんな同じ、できる人ができない人を支える。一見簡単そうに見えるけど、その一步が難しい、しかし、そうやってみんながみんなを支えて思いやりのある優しい未来を、私はたとえ自分一人だとしても取り組んで行きたい。そうすること、いつかみんながそのように考えて行動してくれるようになったらいいと思う。普段、何げなく生活していると、つい自分のことで精一杯になり、他の人にまで気をまわせなくなる。でも、もしかしたら障がいのある人だけでなく、何かに困つて前に進めない人がいるかもしれない。助けを求めていることに私達が気付いていないだけかもしれない。そんなときは、迷わず自分から声を掛けたい。「大丈夫ですか？何かお手伝いできることはありませんか？」と。そして、自分が逆の立場でも、できないことを恥ずかしいと思うのではなく「助けてもらつてもいいですか？」と言える勇気を持つて人になりたい。そしていつでも「ありがとう」という言葉を素直に言える人間になりたい。思いやりのある優しい未来を創るために。

## 認めてほしい

三原市立本郷中学校二年

竹内 嘉音

発達障害は、脳の機能の発達が関係する障害である。人とのコミュニケーションをとるのが難しい、不器用、集中力が無い、じっとしてられない、読む、書く、計算することが難しいなど、社会生活をおくることが難しい障害である。その中に、ディスレクシアという学習障害がある。字を読む、書くことが難しい障害である。

私は、ディスレクシアという障害をもっている。文字を読むのに他の人よりも時間がかかるだけでなく、読めないこともある。言いたいことを文章にすることが難しく、文字として書くというのは私にとってとても難しいことである。

しかし、みんなと同じようにスマホを持っていてラインもするし、みんなと同じようにゲームもする。学校にも行くし、みんなと同じように勉強もしている。それらを、私がみんなと同じようにするのは少し難しい。やりたいという気持ちがあっても、私にとってそれはとても努力が必要

要なことである。

文字を書けるようになるまでに、学校でひらがなを習って練習をすればみんな書けるようになっていくかもしれない。ひらがなやカタカナ程度であれば特にそうだろう。小学校に入学する前に自分の名前やいくつかのひらがなを書けるようになっていく人もいる。私にはそれはできなかった。パッとみた時にそれが文字だと認識すること、文字を見た時にその意味を理解することを難しく思う。そんな私のために、母がひらがなを点線で書いてくれた。漢字練習帳も全て点線でどんな文字を書くのか分かるようにしてくれた。それをなぞって文字練習し、ひらがなを覚えた。なぞれるようになったら今度は書いたものをそのままの状態で書き写すようになった。母は小学校の四年生までずっとそれを続けてくれていた。私が、みんなと同じようにするのはとても難しい。自分だけの努力ではどうすることもできない。

とある教科のテストで先生に「漢字で答えてください。」と言われたことがある。その先生にとっては、漢字で覚えて漢字で答えることができるようになることは当たり前のことなのかもしれないが、私にとってそれは当たり前のことではない。私がパッとみて分かるのは小学校で習う字の中でも画数の少ない漢字とひらがな程度で、カタカナは難しいし、書くのも読むのも時間がかかる。母はそれを知っていて、私のために学校と話をしてくれた。支援学級に通っていること、何のために支援学級にいるのかと話し合いを何度もしに行っていると私は知っている。

私はテストを受ける時もついてくれている人にテストの文章を読んでもらって解答を書き込んでいる。学校のテストでは漢字で覚えることが当たり前で、それができなければならないのかもしれない。

れない。しかし、私が漢字で答えられるようになるまでの時間は他の人の何十倍もかかる。それをダメなことだと言われてしまうと、私にはどうすることもできない。

私の発達障害を理解してもらえないと感じたこともあった。私が支援学級に通っているので他の生徒から「支援学級の子ってなんでそんな感じなん。」と聞かれて、簡単に説明をしたことがある。その時に、この人は発達障害のことを知らないのだと思った。そして、もっと発達障害について知って欲しいと思った。

私は、親が発達障害について知っていて理解をしてくれているからたくさん助けてもらえている。兄や姉も発達障害について知っていてどう関わればいいのかたくさん考えてくれている。毎日の課題も兄が手伝ってくれているし、この作文を書くときも姉が手伝ってくれた。

きっと、発達障害について理解されていなかったり、知らなかったりするせいで困ったままになっている人がいる。そんな人の周囲の人間が発達障害について知っていたら、その人も少し生きやすくなるのではないかと私は思う。理解してもらえないことはとても辛いことだ。

見た目で見えない障害だから、みんなと同じようにできると思われるかもしれないし、みんなと同じようにできていないと、「できない子」「努力が足りない」と言われてしまうかもしれない。じゃあ、私はどうすればいいのだろうか。私が私のままでいる限りずっと「できない子」なのか。私はそうではないと思う。私も他の子と同じだけがんばったらそれを認めてほしい。私の障害のことも知って受け入れて欲しい。そんな私の願いが受け入れられる社会が当たり前になってほしいと願っている。

# 祖父と暮らして気づいたこと

広島県立広島観智学園中学校二年

奥田 杏

「人生楽しんでるか？」祖父が私に言います。祖父は全く目が見えません。それでも祖父は、毎日を楽しんでいます。青春を謳歌していると言っても過言ではありません。

目の不自由な人は、できないことが多いと思っておられる方が多いのではないのでしょうか。

私は大きな疑問を抱いたことがあります。「お祖父ちゃん、目が見えなかったら大変やん。」と友達に言われたからです。私は、ぼかーんとしたと思います。何のことを言っているか分からないからです。「誰が大変なん？お祖父ちゃん？私？もしかして両方？」

私の祖父は五体満足に生まれて何不自由なく大学に進学し、企業に勤め、祖母と結婚し、母たち子どもも生まれ毎日を楽しく生活していたそうです。そんなある日、ちよつと目が疲れていて周りが見にくいと、眼科で診てもらうと、人によって進行度合はまちまちだけど、必ず進行し、いつ失明するかもわからない難病の網膜色素変性症であると説明されたそうです。診断されてか

ら何年かは働きましたが、やはり祖父もゆっくりと視野が狭まり、どんどん見えなくなってしまうので、早期退職しました。今年で早期退職して二十五年目になります。

早期退職をして、何もせず家にいるだけではいけないと思つた祖母が、本が大好きだった祖父につきつきりで点字を習得させました。また、祖母が探してきたそうですが、祖父は二年間、生活を中心に教えてもらえる寮に入っていたようです。

まず、白杖の使い方を習得し、外も歩けるように教え込まれたそうです。パソコンもキーボードを六点使うだけで、ひらがな、カタカナが打てるようになりました。漢字はというと、つくり、へん、かまえなど変換するのにどのキーボードを叩いたらいいかを、祖父は一つずつ覚えていて、一発で漢字変換をしているので、目を使える私からは神技にしか見えません。このキーボード打ちを習得したので祖父は全国の友達とメールでやりとりをしています。大好きな川柳の句会をネット上で開催しているうえ、情報も発信して毎日を楽しんで忙しそうです。

祖父は、ほぼ何でも自分でできます。知らない人が見たら、目が見えているように思うと思います。器用だし負けず嫌いもあり、人ができることは自分にもできると爪切りも、りんごの皮むきもやつてのけます。そんな最強祖父ですが、弱点があります。人から届いた手紙や宅配便が誰からのものなのかわかりません。物を落とした時も、転がってしまった場合はどこにあるかわかりません。また、大勢でいる時、誰が誰に話しているのか研ぎ澄まされた耳でもわからないようです。自分に話されていると思わず、知らん顔をしている時もあります。そんな時は「お祖父ちゃんに話してくれているよ。」と知らせています。ご飯のおかずも何かわからないので、時計の

針の位置で一時は〇〇、三時は〇〇といった具合におかずの内容と位置を伝えていきます。酢の物が嫌いな祖父に、「大好物のタコの天ぷらだよ。」とイタズラをして驚かせ喜んでいきます。

今、私は祖父と一緒に住んでいた実家を離れ、中学の寮で生活しています。だから、長期休みの時しか祖父の手伝いとイタズラができていません。私は生まれた時から世間では障害者と言われる人が身近にいます。いて当たり前前の存在。いないと困る人。尊敬することばかりの私のお祖父ちゃんです。

街で白杖を持った人がいるとすぐに目が行きます。信号を渡ろうとしていたら、困った素振りをしていたら、「一緒に渡りましょうか。」「何かお手伝いしましょうか。」と声をかけてしまいます。「ちょっといらぬとお世話かもしれないな。」と思うこともあります。祖父にできない分、何かしたいと思っています。相手の方が断ってくれてもいいので、私から勇気を出して声をかけたいと思っています。できないから助けようとするのではなく、その人が何かできるためのお手伝いができるようにしたいと思っています。

同じことに変わりはありませんが、私がしてあげていると言う考え方では祖父や相手の方に大変失礼だと思っています。祖父のように、目は不自由でもそんなことは関係なく人生を楽しんで幸せに生きている人もいます。そんな方たちを尊重することが大事です。これは祖父と一緒に生活をして気づいたことです。

## 難聴の望む社会

東広島市立西条中学校三年

徳田 葵

私は生まれつきの難聴であり、両耳とも全く聞こえません。そのため、右耳に人工内耳を、左耳に補聴器をつけていますが、ほとんど右耳で聞いていると言っても過言ではありません。普段の会話では、健聴者のように声で話し、相手の表情や口の形をよく見ながら聞いています。この時、やはり一度では伝わらないことが多く、間違って聞き取ったときは笑われ、聞き返したときは「もういいよ、大丈夫」とどこかに行かれます。今ではすっかり慣れてしまい、自分も笑ってなんとか乗り切っていますが、実際のところ、悲しく、もう話したくないと感じています。ならば、やめてほしいと伝えたら良いのではないかと思うかもしれませんが、それはとても勇気のいることで中々伝えられません。この他にもきちんとして理解されていないと感じたことは色々ありました。また、私だけでなく他の難聴の人も困っていることが多くあることを知りました。

皆さんは身体障害者手帳というものを知っていますか。これは、地方公共団体に認定された障

害を持つ人が障害者であることを証明する手帳であり、それを持っている人は様々な支援を受けられます。例えば、公共交通機関や施設で割引されたり、補聴器や白杖などの補装具の費用を一部負担してくれたりなど、普段の生活が少しでも楽になるもので大変助かります。これは障害の重さによって変わる等級、一番重い一級から七級に分類され、等級によって支援内容が変わってきます。難聴では、一番重い二級から四級、六級で分類され、私は二級です。身体障害者手帳を持つるので助かることが多い一方、私の知り合いには同じ難聴でも軽い人がおり、その人は身体障害者手帳を持つことができません。同じ障害で同じことに困っていても支援を受けることができないうです。どうやら、日本の障害程度は世界保健機関（WHO）の基準と比べるととても厳しくなっているようで、これは不平等ではないのかと感じました。

このことだけでなく、習い事でも少し疑問に思ったことがあります。私が小学生の頃、習い事でスイミングを始めようとしたとき、母が候補に挙がったいくつかのスクールに電話をかけて、ハンディキャップがあってもスクールに入ることはできるかを尋ねました。あるスクールには、

「スタッフが少ないので、安全面を考えると十分な配慮ができないかもしれません。」  
と、とある別のスクールには、

「今まで難聴の子もいたので、大丈夫です。」  
と言われたそうです。当時は特に何とも思いませんでしたが、今思えばいつでもハンディキャップがある人を受け入れられる環境ではなかったのかと思いましたし、今まで難聴がいたとしても

その子と私は聞こえが違うだろうから関係ないのではないかと感じました。また、障害がある、ないに関係なく誰でも簡単に受け入れてほしいなと思いました。

障害がある人は健常者にとって当たり前以上に過ごせる生活に限りがあります。私が望む社会は障害は関係なく、いつでもどこでも誰でも平等に助け合ったり、好きなことができたりする社会です。そのためにはまず、障害について理解してもらわないと何も変わらないから、自分から自分の障害についてのことやこうしてほしいという希望を伝えていきたいと思います。SDGsの目標の一つである、「人や国の不平等をなくそう」、これを目指して障害のある人との関わり方を見直してみてはいかがでしょうか。

## 優しい人になりたい

広島市立安佐南中学校一年

松田 爽

私の双子の妹は、まだ言葉を話せない小さい頃に、熱性けいれんが一時間以上止まらなくなり、脳にダメージがいつてしまい、障害として残ってしまっている。だから、中学生になっても、二才くらいの子と同じ行動をするのだ。

妹が他の子とは少し違うと感じたのは、いつだっただろうか。私が物心つく前から、妹には障害があったから、保育園の年中くらいまではあまり、気にした事がなかったのだ。通う保育園が違って、不思議には思わなかったし、そういう物だと思っていた。たぶん、母は何度も説明してくれていたと思うが、幼少期の私は聞き流していたんだと思う。

だが、保育園の年中くらいの人に母といっしょに私をむかえに来た妹を見て不思議そうな顔をしながら、友達が

「爽ちゃんの妹はなんで歩けないの？」

と、母に聞こえないようにこっそりと聞いてきた。私は答えた。

「ごめん、分かん。」

その出来事が心に残り、友達に聞かれた事を母にそっくりそのまま聞いた。母は、小さい頃の私でも分かるように、分かりやすく説明してくれた。その時にようやく、妹は、他の子とは少し違うと分かったのだ。別にその事が分かったからといって何か変わったたりする事もなかったし、妹の事でいじめられたりする事は、無かった。

ある日、買い物に母と妹と私で行った。

いつも通り、買い物を楽しんでいると、くすくすと何かを、ばかにするような嫌な笑い声が聞こえた。何か、変なものでもあったのかな…? と思い、声のした方をみると、妹の方を見ながら、くすくすと小さな笑い声を立てながら、嫌な顔をしている人がいた。何か一言、注意した方が良いのかな…。

「妹をばかにしないで下さい。」とか…?

などと色々考えたが、私はその時妹にしてやれた事は、その人から、離れる事だけだった。私は、悲しかった。「障害者」というだけで差別される事があるという事を知ったからだ。悲しいと同時に、「なぜ…?」という気持ちがあわいてきた。だれだって、そんな扱いを受けたら、嫌な気持ちになるはずなのに…。ともやもやした気持ちになってしまった。そのもやもやした気持ちを友達に話してみると、

「世の中、そんな人達だけじゃないよ。そんな人達は少なく、優しい人が多いと思う。もし、

今度そんな事があつたら深呼吸をして周りを見てみなよ。優しい人もいっぱいいるはずだよ。」  
と言ってくれた。私は、はっとした。障害者の事を笑う人しか頭にはなかったけれど、障害者を助けてくれる優しい人もいる。大事な事が、頭から抜けていたみたいだった。

大切な事を教えてもらつてから、少したったころ、ショッピングモールのエレベーターで、あの女の人と出会つた。その人は妹を見てから、

「かわいいね」と言つて、妹と手遊びをくださったのだ。妹は、手遊びが楽しかったようで嬉しそうに表情をしていた。私は、正直びっくりしていた。初対面で、妹と遊んでくれる人がいたのは、はじめてだったし、しかも妹のような子になれている感じだったからだ。私がそんな事を考えている時に、女の人が口を開いた。

「私、お子さん向けの障害者専用のデイサービス（障害を持つ、小学生から高校生を対象として、支援を行う施設）で昔働いてたんです。だから、こういう子が大好きなんです。」

と話し、エレベーターから降りるまで妹と遊んでくれた。なんだか、私の心が温かくなった。友達と言つていたように、優しい人はたくさん居て、障害者の事を笑う人は少なかつたんだなと改めて実感したからだ。その、女の人以外にも、優しい人は、たくさんいた。妹が、おばあさんをおばあさんとは、「全然大丈夫だよ。」と妹の頭をなでながら言ってくれたり、小さい子（二才くらい）がせまい通路に居て妹の車椅子が通れなかつた時に小さい子がはしに寄つて「どうぞ。」と言ってくれたり、優しい人は、たくさんいた。そのたびに、心が温かくなって嬉しい気持ちになつ

た。

私は、友達に言われるまで世の中には嫌な人ばかりだと思っていたけれど、優しい人もいて、優しい人の方が多い事を実感できた。そんな優しい人といっしょにしていると、心が温かくなり、嬉しくなるから、私もそんな優しい人になり、だれかの心を温かくできる人になりたい。

## 笑顔の輪

甘日市市立大野東中学校一年

松本 莉奈

「いじめをなくそう!!」

社会的に問題視されている「いじめ。」いじめは人の体や心を簡単に壊すことができます。このいじめに関わる体験があります。私は小学校のころからいじめられやすく、まだ小さいころはあまりいじめられていることを気にしていませんでした。その主犯をAくんだとします。Aくんが私をいじり始めた時から周りの人も私をいじめる標的として見るようになりました。それから、私の物を取ってきたり、容姿などに対しての悪口を言ってきたり、責任をおしつけてきたりと、とても心苦しい日々でした。友達にも先生にも話すことができずどんどん自分の居場所が無くなっていくような生活でした。体がしんどくなった時もAくんに、

「仮病だろ。目立とうとするな。」

と言われ、次の授業を休みました。たった一言で私の心を傷つけました。言葉は人を喜ばせる力

もあれば傷つける力もあります。

「そんなつもりじゃなかった。」

なんて言葉で許される訳がないと私は思います。自分がこの体験をしたからこそ、私はいじめに困っている人を一人でも少なくしたいです。そして、

「私は、あなたの味方だよ。」

と伝えたいです。

こんなにもつらいいじめを無くすには、どうすれば良いかを考えてみました。

まず、環境やふんい気から良くしていくことです。みんなで支え合えるあたたかい空気を自分たちで作れるような環境にすることでいじめるような空気ではなく、おだやかで楽しい空気になると思います。

次に、自分自身を認めることです。いじめの原因は、自分には持っていないことを相手が持っているということから「ずるい。」や「なんであの人だけ。」と思う気持ちからいじめが始まるのも一つだと思います。だから、自分には、こんな良い所があってこんな力を持っているんだと認めることで人を傷つける気持ちも無くなっていくと思います。

最後に、相手の良いところを見つけ伝えることです。視野を広げ、色んな人と交流を増やすことで「この人ってこんな良いところがあるんだ。」とその人の新しい発見があると思います。それだけでなく、「今日、こんなところがよかったね。」と伝えることで相手も自分も明るい気持ちになると思います。また、日ごろから「ありがとう。」や「ごめんね。」など感謝の気持ちや謝る気

持ちを忘れないことも大切だと思います。

私が、このいじめについて考えているとある言葉が思い浮かびました。それは、いつも校長先生がおっしゃっている「想いをカタチに」という言葉です。この言葉には、想いの強さを周りに伝える、そしてそのための言動を伝える、という意味があります。この言葉は自分がいじめられていたら「助けてほしい」と思う気持ちを身近な人にカタチにする、周りに困っている人がいたら「大丈夫？」と自分の想いをカタチにする、という考え方もできると思います。人を思いやり、目の前の困っている人を見逃さないで、自分のなげない少しの行動で明るい空気を作り、私達の勇気を種にして、花のような素敵な笑顔の輪を広げることです。少しでもいじめは無くなるのではないのでしょうか。

## 認めあう優しい世界

広島市立祇園中学校二年

杉山 愛依

私は今、中学二年生、毎日学校に通って授業を受けています。でも二年前の六年生の秋頃、私はその日々を続ける事が辛くなりました。教室にはもちろん、学校に行く事すらできなくなりました。その間、家で自分なりに勉強をしながら、「なんで学校に行かないといけないんだろう」「私は何をしているんだろう」「私は何もできない人間なんだ」と、毎日たくさんのことを考えていました。

そして私は中学生になりました。初めの数日はなんとか教室に行っていました。しばらくたぐさんの人の中で生活していなかったのも、とても疲れてしまい、休んでしまいました。教室に行く事はできませんでしたが、教室に行きにくい人たちが行っている「ふれあいひろば」という教室に行ってみることにしました。その教室にはいつも八人ぐらいの人がいました。勉強をした本を読んだり、思い思いの過ごし方をしていました。そんな中、ある人が私の目につきました。三年生の先輩です。その先輩は机に伏せたり、下を向いていたり、しんどそうな様子の時もある

中で、たくさんさんの授業に出ていました。そんな姿を見て「がんばっているんだな」と思うと同時に、尊敬するようになりました。

また、ふれあいひろばには、いろんな先生たちが来てくれました。そして、そこで過ごしている生徒一人一人に何気ない話をしてくれたり、笑わせてくれたり、褒めてくれたり、励ましてくれたりして、クラスの教室以外で過ごしている私たち生徒も気にかけて、認めてくれていると感じることができました。

そして、私も家族や、先生、友達など、日々の小さなことで周りの人に褒めてもらい、それを自分でも受け入れていったり、尊敬する先輩の姿を見て、気持ちが変わっていき「今日は昨日より少し頑張ってみよう」と思うようになりました。学校にいる時間を少しずつ長くしてみたり、クラスでの授業に出てみたり、いろいろなことにチャレンジするようになり、一つ一つが自信になっていきました。それが今、私が毎日学校に行けるようになったことに繋がったと思います。「毎日学校に行つて、授業を受ける」ことを「頑張っている」と思うことは、人から見ると「ただ当たり前のことをしていただけ」と思われるかもしれませんが、でも、学校に行けなくなつてしまった私も、その後、ふれあいひろばで勉強していた私も、今、毎日学校に行つて、授業を受けている私も、そして、ふれあいひろばの尊敬していた先輩も、今、学校に行けていない人も、教室で授業を受けている人も…すべての人が、誰がどう思い、何と言おうとも、自分が「今頑張っている」と思えたなら、それは「頑張っている」と私は思います。まず、今、自分の中で少しでも頑張っていること、成長していることなどを見つけ、認めることが大切だと思います。

私は、尊敬していた先輩が卒業するときに、勇気を出して、感謝の手紙を書いて渡しました。先輩は突然のことで驚いた様子でしたが、「ありがとう」と微笑んで受け取ってくれました。私がしてもらったように、子供でも、大人でも、他の人の頑張りや努力していること、一生懸命になっていることを認めて「頑張っているね」と声をかけ伝えることで、小さなことでも誰かの心に明るい光をあげられる、そんな優しい世界になるのではないかなと思います。それが人権を守るために、私たちができる初めの一歩なのかなと思います。

# 私が髪を伸ばす理由

福山市立大成館中学校一年

小林 龍矢

私は、小学校四年生から髪を伸ばしています。今は、一番長いところで腰の長さです。何故伸ばしているかというと、ヘアドネーションをするためです。ヘアドネーションとは、病気や事故などで、髪の毛を失った子ども達のために、寄付された髪の毛でウィッグを作り無償で提供する活動のことです。

私は、小学三年生の冬休みから熱が続いて学校に通うことができなくなりました。近所の個人病院で何度か診察を受けていましたが熱は下がらず、血液検査の結果、近くの大きな病院を紹介され、その日のうちに広島市内にある大学病院に入院しました。検査の結果、私の病気は、水泳選手の池江さんと同じ病気でした。抗がん剤治療が必要な病気でした。

私は、一年近く入院して治療しました。治療していく中で髪の毛が大量に抜けていき、とても悲しかったです。だから私と同じ想いをしているような人のためにも、ヘアドネーションをする

と決めて、新しく生えてきた髪を切らずに伸ばし続けて、もう少しで丸三年になります。

小・中学校の校則は、肩につく長さになったらゴムでくくり、前髪が長くなるとヘアピンで留めるとなっていました。ヘアピンで怪我をした場合、血液が止まりにくいので、ヘアバンドの使用を許可してもらいました。しかし髪が伸びていく中で、考えさせられることもあります。それは、髪が長いというだけで、女の子と間違われ、「お姉ちゃん」と声をかけられることがあるからです。ですが訂正はしません。なぜなら私は気にしていないからです。

小学生の時は、恥ずかしくて母にヘアドネーションしていると周りに伝えてもらっていました。中学生になって、誰かに伸ばしている理由を聞かれたら、自分の口で「ヘアドネーションのために伸ばしている。」と答えようと決めていたら、一人しか聞いてきません。そして髪が長いことをからかわれることもないのです。長い髪の自分を自然に受け入れてくれたことがとても嬉し  
い  
です。

また私は治療の中で、たくさん輸血をしました。輸血パックは、コロナ禍の影響だったのか、広島県内だけでなく、岡山、四国からのものもありました。それらを見て私はたくさんの人に助けられ、見守られている気持ちになっていました。

コロナ禍の中で献血する人が減っていると知った母、兄、伯母は献血に行ってくれました。当時の姉は高校生になったら献血に行くと言ってくれました。

私は、輸血をしているので、これから先、大人になっても献血することができません。たくさんの人に助けられ元気になることが出来たのですが、献血できないことが本当に残念です。だけ

どヘアドネーションなら、私にもできることだと気が付きました。

私の想いが伝わったのか退院後、髪の毛の長かった姉、伯母、親戚のおばあちゃんは15センチ以上なら、ヘアドネーションできると知って、すぐに寄付してくれました。また、姉と親戚のおばあちゃんは昨年、二度目の寄付をしてくれました。今は私と母が寄付するために伸ばしていいます。

私の病気がきっかけで、周りの人が知らない誰かのために、手助けをしようと考えたり動いたりしてくれるようになったことがとても嬉しいです。その行動が私の周りだけでなく、世界で行われたら、悲しまずに済む人や苦しまずに済む人が増えるかもしれません。

今はコロナ前の日常に戻りつつありますが、病院ではまだ、コロナに対する制限があります。しかしそれは、患者や病院で働く人達に感染させないようにという思いやりだと私は思います。

私が髪を伸ばすことは小さな取り組みかもしれないけど、ウィッグを受け取った人の大きな幸せになることを願いながら、これからも伸ばそうと思っています。

# 何が違うの

福山市立鞆の浦学園七年

西田 隆晟

ぼくは「みんなとは違う」らしい。小学生のとき、クラスの友達にそう言われて、はじめは「もしかして特別ってことかな」とうれしくて笑っていた。それから「変」と言われるようになった。「普通」が良くて、他の人と違うと「変」なのだろうか。正直ぼくには「普通」 Ⅱ 「みんなと同じ」ということがうれしいことだとは思えなかった。それは、ぼくが「みんな違ってみんな良い」ということが「普通」で、「違うことは当たり前前」だと思っているからだ。

日本国憲法の中には、「基本的人権の尊重」というものがあって、日本国憲法第十一条にはつきりと書かれている。基本的人権とは、すべての人が生まれたときから持っていて、どんなことがあっても守られるものだとして学校で教えてもらった。そして、「人権」とは人として社会の中で自由に考えたり、行動したりして、嬉しい気持ちで過ごすことのできる権利だということも知った。

ぼくの通っていた幼稚園には、「違う」子たちがたくさんいた。「違う」言葉話す子や肌の色が「違う」子、歩き方が「違う」子や見え方が「違う」子。ぼくの通っていた小学校にも同じよ

うに「違う」子がたくさんいた。だから、ぼくが「違う」Ⅱ「変」Ⅱ「おかしい」と思われていることがよく分からなかった。

ぼくは幼稚園の終わりぐらいから、今までできていたことができにくくなった。そして、小学校三年生の頃には、気がつくともう走れなくなっていた。五年生の頃には、どんなに頑張っても、うまく文字を書くことができなくなっていた。歩いていると思っても、すぐにこけてしまい、いつも服が汚れていた。だから、汚れていることもそれほど気にならなかった。話し方が他の人と「違う」ことや、歩き方が他の人と「違う」ことも気にならなかった。とにかく、みんなと一緒に勉強をしたり、遊んだりすることがうれしかった。みんなに追いつきたくて、ぼくなりには一生懸命に歩いた。マラソン大会も運動会も、みんなと一緒に楽しみたいと思って練習を頑張った。でも、修学旅行や卒業式は車イスを使うことになった。ぼくだけに時間を使うことができなから、それは公正で効率的な判断だと思った。ぼくも歩くことが疲れるようになってきたから、みんなに遅れたくなかった。そして、六年生になると、周りの友達と中学校の話をするようになったから、ぼくもみんなと同じように普通に中学生になれると思っていた。でも、周りの友達の中学校在決まる中、ぼくのことを受け入れてくれる中学校は隣の県にしかなかった。とても悲しかった。やつとみんなと「違う」ぼくを受け入れてくれる学校がみつかったときには、とてもうれしかった。

ぼくは、階段は何とかが上ることができなければならない。前に進むことが難しい。すぐにこけてしまう。一歩も歩くことができずにこけることもある。それでも、いくら検査をしても原因がわからない

上に、異常もみつからない。だから、いつも「病気とは違う」という結果になってしまふ。初めて検査をした日からどんな病院で検査をしても、なぜほくが「違う」ことになったのかという答えはいつも見つかからないまま。だから、「障害者」でもない。人として社会の中で自由に行動することに障害があるのに、残念な気持ちだった。

学校でみんなと同じように動けるようにと電動カートの利用が認められたことで、ほくは遠い教室やトイレに自由にスムーズに行くことができるようになった。社会の中では「違う」人に「支援」があるらしい。中学校の先生や友達はいつも助けてくれるけれど、ほくはこの「支援」の対象ではないらしい。例えば、介護保険などの「支援」は、ほくがまだ動けるから入れないこと。何が「違う」のだろう。ほくには友達と一緒に社会の中で自由に行動することのできる権利はないのだろうか。それは、何をどう頑張れば手に入るのだろう。誰もが生まれながらに持っているという権利は、みんなに公平に同じ権利ではなく、本当は「違う」権利なのかもしれないとほくは感じている。ほくなりに頑張ってはいるけれど、ほくはみんなとは「違う」らしい。何が違うの。

## 普通

三次市立川地中学校二年

國重 心美

「普通」に生まれたくても、自分の意思もなく障害をもって生まれてくる人は沢山いる。だから、そういった人達と向き合い、話し合っていくことが大切なのだと思う。

そもそも「普通」とは何なのだろう。周りを見た目が違っただけで変な目で見られ、虐められ、「普通」じゃないから親に暴言を言われる。「普通」じゃないから虐められ、陰口を言われる人生なんておかしいと思う。

私には小学六年生の妹がいる。妹は発達障害を持っていて、クラスの子達とは違う教室で自分に合った学年の勉強をしている。妹は小学三年生までクラスの子と同じように勉強をしていた。だけど、勉強についていくことができなくなり違う教室で勉強することになった。最初は自分の妹が「普通」に勉強ができないことが恥ずかしかった。自分は勉強について行けていたから、自分を基準として「普通」を作り上げていたのだと思う。自分はテストで高得点を取っていたの

に、妹は三〇点や四〇点だったことがよくあった。当時は「なんでそんなこともできないの。」と、よく嘲笑っていた。でも、学年が上がるにつれて、妹は妹なりに頑張っていると言うことが分かるようになった。私は後悔した。妹はちゃんとやっていないのではなく、やりたくてもできない。いまだに理解が遅く、腹を立ててしまうこともあるが、私も少しずつ障害を理解しようと思っている。

妹は障害を持っているけど、私達、家族を笑顔にしてくれる。理解をするのにも時間がかかるし、簡単な計算しかできない妹。でも、私たちを自然に笑顔にできる、それが妹の才能だと私は思う。このような能力を伸ばしてあげることが大切なのではないだろうか。

もし妹がいなかったら、障害を持っている人を冷たい目で見ていたかもしれない。実際、妹のことですら理解できないことが多かった。私自身、成長できないままだったら、障害を持っている人を冷たい目で見ていたかもしれない。

あの人は「普通」じゃないから。そんな理由で障害を持つ人を馬鹿にしたり、冷たい目で見るなど絶対にあってはいけない。言葉や行動によってどれだけ人が傷つくだろう。言葉は時として刃物になる。だから、自分の行動や言動にきちんと責任を持たなければならぬ。

今、私たち家族は妹の障害に向き合っている。周りに障害を持っている人がいない人にも障害を持つ人に向き合い、理解をする気持ちを少しでも持つてほしい。私は、心無い言動や行動をする人に注意できる人間になりたいと思っている。いや、ならなければいけないのだ。差別なく、互いに理解し合い、協力できる世の中にしていきたい。「普通」なんてものはない。性格も身長も

誕生日もみんなそれぞれ違う。障害を持つている人も、そうじゃない人もそれぞれの個性がある。だから、みんな普通じゃないのだ。私はこのことを妹のおかげで知ることができた。日々、色々なことを教わっている。いつも笑顔で、自分の中にある壁を一生懸命乗り越えている妹を尊敬している。そして、私も自分なりに頑張っていこうと思う。障害を持つている人がそれぞれの個性を持って生きられるように。

## 誰にでも

広島市立高取北中学校二年

長尾 芽依

仲間外れにされたことはありませんか。傷つく言葉を言われたことはありませんか。逆に、大切な仲間はいますか。

私の友達は、明るくて元気でいつも笑顔です。何人かの友達でいつものように仲良くしていました。ある日突然一人の子がその明るい友達に冷たくなりました。それは誰が見ても分かるくらいでした。さすがに、明るい友達も気づいたようでした。その友達は「私何かしたかな。」と心配していました。私から見てもその友達が何かしたとは思えません。そして、私は冷たい態度をとっていた子に「私小五のときから苦手だったんだよね。」と言われました。私にはその二人はとても仲良しに見えていたのでとてもびっくりしました。その子からなぜ苦手なのかを教えてくださいました。その理由は私も少し気になっていたことでした。「私もそこは気になっていた」と私は言いました。

それからその友達の愚痴を言う日々が続きました。みんなで部活に行くときにその友達だけが

一人で歩いていることが多くなりました。また、その友達だけを誘わずに遊ぶこともありました。私はそういった事が起きる度その友達から笑顔が消えるのを見て辛くなりました。毎日その友達のことを考えていました。どうしたらいいのかも分からないし、その友達がどれ程辛かったのかを想像すると、自分はひどいことをした立場なのに泣いたらいけない立場なのに涙がどんどん溢れてきました。私はそれと同時に自分がその友達の消えた笑顔をもう一度、とり戻さなければならぬと思いました。

はつきりと何を言ったのかは覚えていませんが私はその友達に声をかけました。その友達は泣きながら今までどんな気持ちだったのか話してくれました。実際に本人から聞くと分かっていたはずなのにとても辛かったです。私はその時、冷たい態度をとっていた子とちゃんと話し合おうと心の中で決意しました。

私は家に帰ってからすぐにその子に連絡をしました。その子も傷ついてしまわないように優しい口調でメッセージを送りました。既読がついた瞬間、心臓がどこにあるのかはつきりと分かるくらい胸がドキドキしました。なんて返ってくるのか、自分も仲間外れにされるのではないかな不安が押しよせてきました。そしてその子からは、「私もやりすぎてるなって思ってた。」と返ってきました。その時私は「自分がやらなければならない」と感じました。それから私は「二人の心によりそいお互いが納得した状態できちんと和解してまたみんなが笑顔になれること」を願い、二人の相談にのり、色々なことを伝えました。もちろん大変だったけど二人ともしっかり自分の行動について考えていました。だから、私もいっしょに考え、行動をすることができました。

それからしばらくして冷たい態度をとっていた子にいつも通り相談を受けているとその子に「謝ろうかな。」と言われました。私はとてもうれしかったです。謝った後もしばらくは元の関係にはなれてなかったけどたくさんお出かけなどをしていているうちに、私達はなんでも言い合える大親友になりました。

この出来事は私にとって忘れられないものになりました。

いじめをしないということは、ほとんどの人ができます。でも、いじめをうけている人によりそうことができる人は少ないです。私はさらにいじめをしている人にもよりそう人はもつと少ないと思います。みんなの心によりそうそれが人権を大切にすることです。私の二人の大親友は言いました。「よりそって・はつきり言ってくれてありがとう。」次はあなたが出すんです。その勇気を。

## 性別の壁をこえて

広島県立広島中学校三年

今井 花音

私の髪は短い。髪型だけ見ると、よく男子に間違われるほどだ。小さい頃からずっと、かわい  
いよりかっこいいに憧れをもっていた。ピアノの発表会るときに着るフリフリしたドレスがとて  
も苦手だった。性格も男まさりな部分があり、そんな私を見てまわりの大人達はよく、  
「もっと女の子らしくしなさい。」  
と私に言った。

部活動でバスケットボールを始めた。それはもう、自分の生活の中心となるほど熱中し強くな  
りたい、上手くなりたいという思いからどんどんのめり込んでいった。ある時、顧問の先生のご  
縁によって、全国で活躍する広島県一の高校の練習にお邪魔することになった。そして、かつて  
ないほどの衝撃をうけた。その高校のバスケット部には誰一人として髪を結ぶほどの長さの人がおら  
ず、全員ショートカットだったのだ。理由を聞けば、プレイに支障をきたさないためだと教えて  
くれた。彼女達にとってはバスケが全てで、そんな真剣な姿がとてがかっこいいと思った。そし

てすぐさま私は、親に

「私もあんな風に男の子みたいな髪型にしたい。」  
と伝えた。

すると、親に

「女の子らしくなくなるけど本当にいいの？彼女達はバスケが全てだけど、あなたはそうじゃないからきつと後悔するよ。女性らしさを大切にしたい。」

と言われてしまった。私はだまって言うことを聞くことしかできなかった。本当にやりたいことをつらぬけるだけの勇気が私にはまだなかったのだ。しかし、その後も何度もバスケに生きる彼女達をみて、私はついに髪を短く切ることを決意した。そしてもう一度親にその意思を伝えた。しかし、

「女の子らしくなくなってしまう。」

と否定的な意見を再度言われた。この時ばかりは、どうして私のやりたいことを応援してくれないのだろう、そもそもなぜ女の子だから女の子らしくしないといけないのだろうかと、悲しみと悔しさがこみあげた。そして、勇気を出して親に言った。

「どうして誰かのための私じゃないといけないの？」

私はすぐに言ったことを後悔した。親は私のことを思っていてくれていただけだったのに少しきつい言い方をしてしまった。しかし、

「ごめんね。花音が後悔してしまわないかが心配だったんだ。」

と、私が私らしくあることを肯定してくれた。

私はこの時、勇気を出して声をあげることの大切さを知った。どうせ理解してもらえないだろうと思ひ込んで落ち込むより、自分の思いをきちんとぶつける方が自分も相手も後悔せずに済むと思う。また、周りの人もその人がなりたい自分になれるように、認めて受け入れる努力をすることが大切だと思う。お互いがお互いを知り、認めることが肩書きや偏見にとらわれないために一番必要なことだと感じた。

昔からよく、男の子は青色、女の子は赤色と無意識のうちに皆思ってきた。だからトイレのマークは、男子と女子で青と赤で示されていた。しかし、最近ジェンダーレスへの意識が高まる中、ショッピングモールのトイレのマークが男女とも黒色になっているのを見かけた。社会全体が今、少しずつ変わってきているのを感じ、とてもうれしい気持ちになった。

私は女の子として生まれ、女の子として生きている。しかし、性別にとらわれることなく自分らしく生きていたいと思う。人は決して一人では生きられないから、ありのままの自分を生きられる環境をつくっていかなくてはならない。そして、勇気をもってその環境に足をふみ入れる自分の心が一番大切である。

これから出会う人達、今まで会ってきた人達、様々な人がいるが、見た目にとらわれずその人の人間性と向き合えるような人になりたい。

## 思いを次の世代へ

広島県立三次中学校二年

西岡 舞花

「戦争は、絶対に起こしてはいかん。戦争という恐ろしい体験は、私達の世代で、最後にしてほしいんじゃない。」

心の奥深くにずしんと響き、ずっと忘れることのできないこの言葉。これは四年前、広島で原爆の被害に遭われた方が、私たち小学生に向けて語られた言葉です。何度も何度も「戦争は、何があってもやっつけてはいけない」と繰り返されました。まるで私たちの心に、言葉を刻み込むかのように――。この言葉を伝えて下さった方は、三年前に始まったロシアとウクライナの戦争報道を、どんな思いで聞かれたのでしょうか。私自身、家を焼かれ愛する肉親を亡くすなど、戦争で苦しむ人達の様子を報道番組で見るたびに、とても胸が苦しくなります。

世界では、このような戦争以外にも犯罪や事件など、日々たくさんの問題がおきています。戦争や犯罪、様々な事件によって、家族や友人を失い傷つく人たち、安心安全な日常と程遠い環境で、日々怯えながら生きている人たちがいます。私は、どうしたら平和な世界が築けるのか、どうしたら幸せな日々が送れるのか、改めて考えてみました。

私は今、とても幸せな日々を送っています。学校に毎日通うことができ、夕方、一日の疲れを感じながら帰宅すると家族が温かく迎えてくれます。小さなことかもしれませんが、とても幸せなことだと思います。このような幸せがずっと続くことを、平和で安心できる日常がずっと続いていくことを、地球上の誰もが心の中では願っていると思います。ではなぜ、現実はそのようになってはいないのでしょうか、私は、自分が幸せならそれでいい、自分の国が平和ならそれでいい：という、自己中心的なものの方や考え方が、今の世界に共通する課題ではないかと考えます。自分も含めて、ともすると今の世界では、そうした自分勝手なものの方や考え方に陥ってしまう人が増えているのではないかと感じます。誰もが安心できる平和な世界を築くためには、そうした自己中心的な考え方から脱していくことが大切だと思います。

では、その為に大切なこと、必要なことは何でしょうか。私は「体験から学ぶこと」だと思います。戦争で命を奪われた人々や傷ついた人たちの体験に目を向け、そこから発信されるメッセージに耳を傾けることがとても大切だと思います。私は、学校の授業やテレビ番組を通して、戦争時の映像や動画を見たことがあります。それらを見た時は、顔を伏せてしまいたいほど苦しくなりました。と同時に、戦争の苦痛を、今まさに体験している人がいることを実感しました。私は、戦争や犯罪を起こさない為に、「戦争とはどういうものなのか」「命が奪われるとはどういうことなのか」を事実から学ぶことはとても重要だと思います。体験した人でなければ語れない事実、思いやメッセージを受け取り、次の世代へと受け継いでいくべきです。

「戦争という恐ろしい体験は、私達の世代で最後にしてほしい。」と言う言葉を、私は忘れること

ができません。その方は、次のようにも語られました。「体験者が少なくなった今、残された時間をかけて若者に語りたい。体験を次の世代の若者に語り継いでほしい。」と。人間は忘れる生物です。体験は、語り継いでいかなければ、やがて忘れられてしまいます。「語り継いでほしい」という言葉の奥にあるのは、一人ひとりの人間が、かけがえのない「命」を大切にすること。自分の命と同様に、他の人の命を大切にすること。お互いを思いやり行動すること、身近なことから始めて、世界の平和に繋げていくこと。

誰の心にも夢や希望が灯り、笑顔が輝く世界。体験や思いを次の世代、又次の世代へとリレーし、一人ひとりの努力と連帯の輪で平和な世界を築いていきたいです。

# 人権作文を読んで

広島県人権擁護委員会連合会子ども人権委員会委員長

河野 和夫

このコンテストの目的は、次の二点です。

○中学生が、身の回りの人権について深く考える機会とすること  
○彼らの人権意識と願いを広く届けること

今年度の応募総数は2330点。人権を考える際に見据えるべき願いとあるべき展望に触れることができます。応募してくれた皆さん、ありがとうございます。

それぞれの作者がどんな願いや思いをもって書いているのか、それをしっかり汲みとる審査でありたいと考えました。生成AIの功罪が取り沙汰される昨今、身近な体験や社会での気づきを自分のことばで応募していただきました。だからこそ、多くの人に価値を伝える力を持つのだと確信しています。

## 1 人権擁護の本質

人は、どんなとき充実して生き生きした気持ちになるでしょう。逆に、どんなとき絶望的な気持ちになるでしょう。今現在または将来、自分一人ではどうにもできない悩みに苦しむかもしれないわたしたちです。

作品は教えてくれます。「いつも元気なあの子が暗い顔をしている。あの子の明るい顔が見たい」。そのために、かけがえのない存在として相手を認めること、かけがえのない存在として相手に認められること。多くの作品の中に人権擁護の本質を見ることが出来ます。明るい顔を取り戻すために「いつ、どんなことを、どの場面で、どのように、なぜ」やるのが述べられます。加えて「だれがやるのか」。「そりゃ、他のだれでもない、自分よ」それをハッキリさせている作品が多くなっていることが嬉しいのです。

苦しいときに助けられた人間は、静かな決意をするのではないでしょう。か。「あなたが困ることがあったら、黙っていないぞ」と。人はそういう生き物です。

## 2 あなたの思いやりにありがとう

時代の変化を反映し、多岐にわたるテーマが取り上げられるようになりました。審査を通して、どのテーマにも共通し、今も昔も変わらず大切にされているキーワードがあります。多くの作品で、思いやりと表現されていました。

思いやりは本能ではありません。子育てや教育など、小さいころからの人間関係の中で育つものです。生まれ持った本能ではないので訓練が必要です。なあと、難しく考える必要はありません。

ん。友だちが転んだとき、「痛いだろうなあ」そう感じられるだけでいいのです。その経験の積み重ねが、自分の利害と関係のない場面で如実に現れることになるはずです。

思いやりの心を一粒の錠剤に例えると、その中身は三層構造になっているそうです。

### (1) 感謝と祈り

自分の都合だけを考えるとき、他人の立場を慮ることはできません。人への感謝がないのに、人を思いやることもおぼつかないでしょう。そう考えると、多くの人や自然の恵みに感謝できる人が大切にされる理由がわかります。何より、人の幸せを祈ることができる人、人の不幸を放っておけない人は、理屈抜きにステキなのです。

### (2) 想像力

「他人の痛みを知る」「相手の気持ちになって考える」、これは想像力の働きです。想像力は経験を通して磨かれます。辛い経験をした人が同じようなことに遭遇した人に共感できるのは、自分の経験をもとにその人の気持ちを想像できるからです。

### (3) 自信

自尊心のない人に、他人を思いやることはできません。皆さんが日々、続けていることで自信をつけてほしいと願っています。自信の育て方は単純明快、「今できるベストを尽くした」そう思えるだけでOKです。小さな自信の積み重ねは、あなたの「やりきった」感と「次もきつとうまくいく」感を高めてくれること請合いです。

自分らしい思いやりって何でしょう。口で言うほど簡単な話ではありません。わたしのような年齢になっても、ままならないのが現実です。ただ、貫くべきは、思いやりを裏打ちされたあなたらしさ。「あいづらしいなあ」それが褒めことばになったとき、あなたが積み上げたものは誇りと呼ばれることになります。

かけがえのない存在として相手を認め、認められることの大切さ。それらを、いっしょに考える機会をいただいたことに感謝しています。



## ■ 審査員（敬称略）

広島県教育委員会事務局学びの変革推進部 豊かな心と身体育成課指導主事	池田 準
広島市教育委員会学校教育部 指導第二課人権教育担当指導主事	宗本 千鶴
NHK広島放送局 視聴者リレーションセンター専任部長	有福 数美
広島県人権擁護委員連合会会長	足立 修一
広島県人権擁護委員同連合会 子ども人権委員会委員長	河野 和夫
広島法務局人権擁護部長	正木 開志

## 第42回 全国中学生人権作文コンテスト 広島県大会 入賞作品集

令和6年2月 印刷  
令和6年2月 発行

- 発行者 〒730-0836  
広島市中区八丁堀6-30  
広島法務局  
広島県人権擁護委員連合会
- 印刷社 広島市西区横川新町10-39  
サンヨーメディア印刷株式会社

禁無断転載

◎本文集を教材等に使用される場合には下記にご連絡下さい。  
広島法務局人権擁護部第一課 電話 (082) 228-5790



## ～いじめ問題に関する再度の緊急メッセージ～

いじめをしている人は遊び半分やストレス解消のつもりかもしれませんが、いじめは相手の人を死に追いやりかねません。自分の人生も取り返しのつかないものにしかねません。いじめは絶対にしないでください。いじめをしている人はすぐにやめてください。

いじめを受けている人、いじめを見た人、いじめを聞いた人は、私たち人権擁護委員に連絡・相談してください。

小中学校を通して全国の小中学生に配布した「子どもの人権SOSミニレター」を使って連絡・相談しても、全国共通・無料の「子どもの人権110番」(0120-007-110)に電話してもかまいません。メールも受け付けています。秘密は必ず守ります。

私たち人権擁護委員は、「人権」を護り、救済するための仕事に取り組んでいます。いじめを、そして、仕返しをストップさせるために、全国1万4千人の人権擁護委員が全力を尽くします。どうか声をあげて、私たちに助けを求めてください。

保護者の皆さんも、お子さんを護るために、気になることがあれば遠慮なく、人権擁護委員に声をかけてください。

人の命はかけがえのないもので、子どもの未来は人類の未来なのです。この未来を希望に満ちたものにしたい。これが私たちの願いです。

令和5年5月22日

全国人権擁護委員連合会

# 子どもの人権SOSミニレター

相談したいことを書いて送ってください。

**切手はいりません**

あなたが悩んだり困っていることなどについて書かれた手紙を、人権問題に詳しい人権擁護委員や法務局職員が読んで、手紙や電話でお返します。相談内容や個人情報などの秘密は守りますので、安心して相談してください。



法務省の人権擁護機関では、  
人権に関する相談を受け付けています。  
相談は無料で、秘密は守ります。

みんなの人権110番  **0570-003-110**  
(電話をおかけになった場所の最寄りの法務局につながります。)

こどもの人権110番  **0120-007-110**

女性の人権ホットライン  **0570-070-810**

外国語人権相談ダイヤル  **0570-090-911**



人権イメージキャラクター  
人KENまもる君・人KENあゆみちゃん

インターネット人権相談受付窓口

<https://www.jinken.go.jp/> (パソコン・携帯電話・スマートフォン共通)



SNS(LINE)による人権相談

友だち追加はこちらから!

アカウント名:「SNS人権相談」 検索ID: @snsjinkensoudan

